

第二百三十七話 独断、作戦目的変更の大なる付け！

日本は支那戦線（大陸正面）では負けていないと云われるが、手痛い痛撃を幾度となく受けている。対米英戦との絡みで言えば、長沙作戦がその好事例かも知れぬ。日本陸軍の悪弊か。



1 長沙作戦の概要

支那派遣軍は、1941(S16)年当初から重慶政府を転覆させ支那事変解決の機会を作為すべく一大攻勢作戦を計画しつつあった。然しながら、独ソ戦開戦、関特演への兵力転用加えて南方作戦準備の推進もあり、本攻勢作戦の中止論も台頭するという状況であった。が、支那派遣軍隷下の11軍司令官は、大いなる情熱をもって作戦準備を推進、結果的に大本営も支那派遣軍も制約条件を付しての作戦を認可した。

(1) 第一次長沙作戦(1941/9/18～10/6)

長沙所在の中国軍第9戦区軍の戦力撃砕を作戦目的に4個師団をもって湖南平野の中突破を期すとの計画であった。9月26日には長沙市街に突入し、28日には占領を完了した。作戦目的を達成した日本軍は、10月1日戦略的撤退をした。この戦略的撤退を日本軍の敗走、長沙は難攻不落と中国軍に日本軍内では憤懣が噴出していた。

(2) 第二次長沙作戦(1941/12/24～1942/1/16)

対米英戦の開戦に伴い、大陸では香港攻略作戦が行われた。本作戦を支援する目的で、第一次作戦時の三分の二の兵力であった第11軍が第二次長沙作戦を実施した。本作戦は、香港攻略日本軍の背後をつくべく広東方面へ南下する中国軍を牽制すべく急遽計画されたものである。

10月25日、香港の英軍が降伏し、11軍の作戦は基本的には終了する筈であったが、第一線師団は汨水を渡河して攻撃を続行した。軍司令官は、反対する参謀を深夜まで説得して、支那派遣軍総司令部に長沙進の許可を得ようとした。12月29日、師団長の長沙進攻の具申を受けて、軍司令官は独断長沙進攻を決心し、師団に追撃を命じた。支那派遣軍も追認した。日本軍は、中国軍の天炉戦法という誘致導入戦法に大苦戦を喫した。1月3日、反転命令を発令した。各部隊は、一部において玉砕し、重圍下に陥り、離脱に困難を極めたが、相当数の死傷者を出しつつも、1月16日頃撤収完了した。

2 若干の観察

- (1) 第一次作戦が中国軍の誇大宣伝・逆宣伝に利用され、且つ支那派遣軍司令官の不満を承知していた11軍司令官の私情が第二次作戦における痛撃の要因となった。
- (2) 一次作戦に比して、作戦準備(情報収集、兵站)が極めて不十分であった。兵力不十分にして、十分に準備した敵防御陣地に攻撃するのは相手が如何に弱兵であったとしても無謀でしかない。敵を甘く見過ぎている。兵は、蒋介石給与に期待せざるを得ないほどで困窮していた。
- (3) 第二次作戦は、当初の作戦目的は達成していたにも拘らずの独断の長沙進攻は解せない。積極果敢放胆な作戦指導が是認されるのは飽くまでも任務の範囲内であって上級指揮官の意図・企図の範囲内で、且つ命令を受ける暇のない特別な状況下である。大部隊では通信が確保され、起き得ぬ筈だ。
- (4) 上級部隊の軍司令官の独断決心の追認は如何なものか？日本的温情主義？派遣軍司令官や参謀の現地確認はどのように行われたのか？
- (5) 作戦失敗の責任は誰が負うべきか？その調査は為されたか。
- (6) 国民政府に誇大宣伝・逆宣伝の格好の材料を結果的に提供したとも云える。中国軍に大きな自信を与えた。強かさを少しは見習うべきか。
- (7) 1次と二次では作戦目的が異なるにも関わらずに、敵撃滅に邁進するとは！

(了)